

## 『ジェイン・エア』にみられるヴィクトリア朝イギリス社会(1)

加塩 里美

Victorian Society in *Jane Eyre* (1)

Satomi KASHIO

## Abstract

This paper deals with the historical background to Charlotte Brontë's *Jane Eyre*, the Victorian era. The first chapter looks at *Jane Eyre* and the Victorian age. Great Britain achieved remarkable development during this period. Meanwhile, stresses in society, such as squalid working conditions and the rise of feminism were becoming visible. The fact that this novel was a literary sensation at the time was related to public feeling. The subject of this chapter is the relationship between the feeling of the author and the heroine, Jane. Next, the second chapter deals with Christianity in the novel. Through the description of the doctrines of Universal Salvation and Calvinism in *Jane Eyre*, the sympathy and antipathy of Brontë toward each doctrine become clear. Finally in the third chapter, insanity and mysteriousness are investigated. The 'mad wife', Bertha, emerges from the shadows into the light. Together with the clear manifestation of insanity, Bertha casts light on the history of the time. The social conditions of Imperialism made this Creole appear as a foil to the English heroine. The mysteriousness of the novel was also brought about by breaking down of the boundaries between the natural and supernatural by the author.

**Keywords:** *Jane Eyre*, Young women in the Victorian age, Universal Salvation, Creole, Ladies in Great Britian

## 第1章 イギリス社会と『ジェイン・エア』

## 第1節 世界的規模の変革の動きと産業革命の影響

シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-55) は, 1816年4月21日にパトリック・ブロンテ (Patrick Brontë) とマリア・ブロンテ夫妻の3番目の子供として, ヨークシャーのブラッドフォード近郊, ソートン (Thornton) で生まれた。彼女が生まれた頃は, ヨークシャーでのラダイツ運動は徐々に下火になり, それに代わって「もっと一般的な政治的急進派の台頭」<sup>1</sup>がみられた時期である。一例をあげるならば, 1815年穀物法の制定と1819年「穀物法廃止や選挙法改正を訴える労働者の集会への政府の武力弾圧による11名の死者を出したくピーター・

1 Charlotte Brontë. *Jane Eyre*. Edited by Margaret Smith Chronology, xlvi.

ルーの虐殺>」<sup>2</sup> がそれにあたる。

シャーロットが成長していくのは、産業革命と共にイギリスが変化していく時期である。1832年選挙法改正、1833年工場法成立、1834年救貧法見直し、1846年穀物法廃止など、世の中のひずみに対して人々が関心を向け、より良い暮らしを求める意識が高まった時代であるといえよう。このような当時の政治情勢や産業革命の影響、社会の風潮、大衆の動きなどに彼女が敏感であったことは、よく知られている。

当時が、国際的にも不安定な時代であったことは、次のような史実からも理解できる。1830年にはパリで7月革命が勃発し、スペインやポルトガルでは独裁政治に対する反乱が起きている。また同年、ベルギーの独立が保証されたことなどがある。このように、イギリスも国内情勢のみならず世界全体の動きを見据える必要がある時期であった。

イギリス国内は、産業革命に影響されて、毛織物工業の驚異的な伸びから労働者たちはさらなる苦役を強いられていた。労働者のみならず、当時は児童労働の問題が深刻であった。この時代には、こどもは「小さなおとな」とみなされていたのである。所帯主の週給だけで一家を支えられない労働者家庭は、子供の稼ぐ賃金も大切な収入源となっていた。その背景には、労働の細分化や単純化により低年齢の子供でも労働力となることが可能になったことがある。指昭博の指摘によると、当時は「体の小さな子供たちは大人には狭くて無理な所でも、もぐりこんで仕事ができるので、自動紡績機の下で作業をさせられたり、細い坑道などで使われたりするので、その危険性が問題になった」<sup>3</sup> という厳しい実態があった。これらを受けて、<1830年にリチャード・オーストラー (Richard Oastler) は、ブラッドフォードの織維工場で働く子供たちの雇用の実態を描いた「ヨークシャーの奴隷制度」(‘Yorkshire Slavery’) という記事を載せ><sup>4</sup>、それに触発されて、悲惨な児童労働に改善を求める声が多くの人々からあがった。1833年には工場法が制定され、児童と未成年者の労働時間にそれぞれ法的な限界を定めた。その後1838年の市民憲章を経て、1842年には「シャフツベリー卿の鉱山法が成立し、10歳以下の児童や婦人の地下炭鉱内での労働が禁止」<sup>5</sup> になるなどの変革が行われた。

シャーロットの伝記から、『ジェイン・エア』(Jane Eyre, 1847) 執筆の基礎となるこの時代の行動を拾い上げてみる。1824年、『ジェイン・エア』のローウッド学院のモデル、カウアン・ブリッジ・スクールに入学する。1826年の初頭、10歳の彼女は、初めての物語を書く。同年6月には弟や妹たちと、後に『グラスタウン物語』と呼ばれる架空の町の出来事を題材にした物語群の制作に熱中する。この空想の遊びは、シャーロットがロウ・ヘッド校に入るまで5年間ほど続き、プロンテ文学の基礎をはぐくんだ。また、1839年には『ジェイン・エア』の登場人物、セント・ジョン・リヴァース (Saint John Rivers) のモデルの1人とされるヘンリー・ナッシー (Henry Nussey) からのプロポーズを断ったという記録が残されている。

また、彼女の作品に強い影響を与えたガヴァネスとしての経験を積んだのもこの時期である。1839年にはストーンガッペ (Stonegappe) のシズウィック家 (Sidgwick)、1841年にはアッパー

2 指昭博『図説イギリスの歴史』河出書房新社、2004年、104ページ参照。

3 指昭博、97ページ参照。

4 Chronology, xlvii

5 ジョージ・M・トレヴェリアン、松浦高嶺・今井宏共訳『イギリス社会史 2』みすず書房、2000年、447ページ参照。

ウッド・ハウス (Upperwood House) のホワイト家で、それぞれガヴァネスとして従事している。その後、1842-43年にはブリュッセルのマダム・エジェ (Mme Heger) の寄宿学校に留学し、そこでフランス語を学んでいる。この留学経験やつらい恋愛体験を反映させた作品が『教授』(The Professor) である。帰国後は、1844年にハウスの牧師館で学校を開く計画に向けて、妹たちと共に行動したが、思い通りには進まなかった。1846年に『教授』(1857年、死後出版)を書いたのち、1847年に『ジェイン・エア』が出版され、一躍人気作家となるのである。このように、彼女は作家としての名声を得るまでに様々な世の中の動きを見て、自分の心の中に取り込んできたことがうかがえる。

次節以降は、作品『ジェイン・エア』の中から、現実社会の動きと連動する描写や発言をもとに作者の心を探る。

## 第2節 ゲーツヘッドでの厄介者

主人公のジェイン・エア (Jane Eyre) は、幼いころ父母を亡くし、母方の伯父の家であるリード家に引き取られた。彼女は、血のつながりのないリード夫人 (Mrs. Reed) の庇護の下、つらい生活を送っていた。この家では、厄介者として扱われていたのである。リード夫人は次のように話す。「とんでもないお荷物が残されたものだよ。あの理解しがたい性格が、いつ何時でも面倒をひきおこすんだ。おまけに、突然かんしゃくをおこすのさ。人の動きを絶えず観察するような、あの子の尋常でない眼差しで言ったらないよ。」(Ch.21, p.231)<sup>6</sup>

ジェインの伯父であるリード氏は、亡くなる間際、夫人にジェインを託し、家族同様に育てることを約束させた。しかし、夫人の目には「……この子は私が望んだとおりの性格や気質を持っているとは言い難い」(Ch.4, p.33)と映り、愛情を持てなかったようで、酷い扱いをする。その息子のジョン・リードも、絶えずジェインをいじめ、暴力をふるう(Ch.1, p.11)。夫人の2人の娘たちは、強情で利己的な娘と辛らつで意地悪で傲慢な娘である(Ch.2, p.15)。

この家でのジェインの立場は、「ヨークシャーの奴隷制度」をほうふつとさせる「ゲーツヘッドの奴隷制度」の中の奴隷と位置づけられる。そのことは、次の場面に如実に表れている。ジェインが「私は召使いですか」と小間使いのベッシーに問うと、「いいえ、あなたは召使いにも劣ります、自活する道がないのですから」(Ch.2, p.12)と答える。ジョン・リードは、ジェインをいじめ、彼女に向かって「……お前は文無しだ、父親が何にも遣してくれなかったんだ。物乞いをしろ」(Ch.1, p.11)と暴言を吐く。そして、言葉のみならず、小間使いはジェインに、召使いよりさらに下級の、言うなれば奴隷が行うような仕事をさせる。部屋の片付けや椅子のほこりを払わせるのである。ジェインはつぶやく。「ベッシーは今や、しばしば私を子供部屋の女中の下働きとして使う。」(Ch.4, p.30)

これらの出来事の後ジェインは、あまりにも不当なジョン・リードのふるまいに怒りを爆発させ、暴力をふるう。この時、彼女が心情を吐露した表現は、注目に値する。「……私は、反乱を起こした奴隷のような気分がして、苦々しい力を内に秘めたまま、息巻いていました。」

6 日本語は加塩訳。引用はすべて以下のテキストに従い、本文引用末尾に章とページ数を記載する。Jane Eyre. Edited by Margaret Smith. With an Introduction and revised Notes by Sally Shuttleworth. New York : Oxford University Press, 2000.

(Ch.2, p.14) 自分を奴隷になぞらえたこの言葉は、宗主国の人々、支配者の不当な仕打ちに対して、植民地の人々、奴隷の暴動を起こした後の心情そのものである。勝利を収めたとしても、それは一時的な喜びにすぎず、圧倒的な力を前にして、後悔の念や後味の悪さが心の中に渦巻いている。このジェインの子供時代の体験は、子供、奴隷、労働、反抗、暴動などがキーワードとなっている。作者シャーロットの目を通した、イギリス社会の姿の一部を取り出し、『ジェイン・エア』というフィクションの中に描きこんだのである。

### 第3節 鬱屈した階級意識

ジェインは、ローウッド学院 (Lowood Institution) を卒業した後、18歳まで教師として同学院に務める。その後、新しい勤め口を探し、ソーンフィールド・ホール (Thornfield Hall) にガヴァネスとして落ち着く。ここでは、フェアファックス夫人 (Mrs. Fairfax) や教え子のアデル・バランス (Adèle Varens) と打ち解けることができ、穏やかな生活を送る。この後、ジェインは人生に大きな影響を与えるエドワード・フェアファックス・ロチェスター (Edward Fairfax Rochester) と出会い、新たな人生が展開していく。

彼が登場する前の屋敷での生活は、あまりにも単調で静かであり、ジェインは物足りなさを感じる。そして、ここではなく違う場所で、もっと生き生きとした人たちと交わりたいと思うようになる。庭に出て、門を通して外の世界を見た時や屋上で遠くに見える野山や地平線を見た時など、動きのある世界に思いを馳せ、そこへ行きたいと思う (Ch.12, p.109)。ジェインは、そのような落ち着かない心を抱く自分という存在に関して、本文中で発言する。「(平穏な生活に満足できない私を) 非難したい人は誰でもそうすればいいわ」(Ch.12, p.108) という発言と「誰が私のことをとがめるかしら。多くの人よね、間違いなく。私を満足することを知らない人だと言うでしょう」(Ch.12, p.109) という2つの発言である。ここには、誰からの批判にも動じない意志や自分の落ち着かない心を肯定し、変化を望む気持ちを奮い立たせようとする強い自我が存在する。その後内なる声の語る物語に耳を傾け、三階の廊下を行ったり来たりするのである。

サリー・シャトルワース (Sally Shuttleworth) は、このように自分の心情を吐露すること、つまり自我を意識することを、心理学と当時のイギリス社会とを関連付けて次のように述べている。「……心理学は、ヴィクトリア時代には、今日のように、決して無害な学問ではありませんでした。自我について書くことは政治的な行動であります。」<sup>7</sup> ここからわかるとおり、主人公に心情を告白させる行為、それが女主人公であればなおさらのこと、そこにエリザベス・リグビー (Elizabeth Rigby) のように、不穏な空気を読み取る人々が存在したのも理解できる。さらに言えば、その内容も過激といえるほどの明確な意志表明である。そこには上昇志向を持つ女性の、次のような現状に対する不満や積極的行動を求める抑えきれない心の高ぶりが読み取れる。

7 日本語は加塩訳。Charlotte Brontë and Victorian Psychology. Sally Shuttleworth. Cambridge University Press, 1996. p.148; Psychology however, has never been an innocent discipline: in the Victorian period, as today, the writing of the self is a political act.

人々に穏やかな生活に満足せよと言っても無駄なこと。行動を起こさなくてはいけない。どこにも行動する場がなかったら作りだせばよい。何百万もの人が私より静かな運命を与えられ、そして何百万もの人が、その運命に対して、無言の反乱を起こしている。政治的な反乱は別にしても、どれほど多くの地球上の一般大衆の心の中に、反抗する気持ちが育っているのか誰にもわからない<sup>8</sup>。

ここには、ジェインの口を借りたシャーロットの、当時の社会への思いが込められている。しかしそれは、彼女個人の不満や怒りにとどまらない。この時代、中流階級の人々の間では、女性は穏やかで控え目な性質を持っているので、守られるべき存在として人生を送り、結婚後は「家庭の天使」となり、家庭に安住することを望む存在である、という考え方が大半を占めていた。この発言の中に込められているのは、そのような考え方によって作られた、目には見えないが拘束力の強い鎖に対する女性達の不満でもある。さらには、仕事を持って男性以上の働きをしているという自負があるのに、女性であるというだけで低い報酬に甘んじなければならなかった働く女性の怒りとも考えられる<sup>9</sup>。また、この「平穩を打破したい心」は、性差のみならず、階級差に阻まれ不公平や不当な仕打ちにも声を上げられずにいた「一般大衆」(the masses)の「変えたい」という望みを表したものととも考えられる。“the classes”(上流、富裕層)と対照的な“the masses”(一般大衆、庶民、労働者階級)の不満や抑圧感は計り知れないものであったろう。シャーロットがここで、“the masses”という「当時の政治的流行語」<sup>10</sup>を用いていることは注目すべきである。人民憲章が採択され、チャーチスト運動が隆盛を極め、人々の間では政治や社会に対する関心が盛り上がっていた時代である。この時代に小説を書くにあたって作者は、主人公に自我を見つめさせ、その自我を肯定させている。その上、発言内容も、当時の社会では女性らしくないと受け取られかねない内容である。しかし、この小説が、発売当時熱狂的な支持を持って受け入れられたことを考え合わせるならば、主人公のこの言葉に多くの人々が共感したことがうかがえる。

温和な夫人の話し相手やアデルの教育だけに飽き足らず、もっと自分がやりたいこと、自分にふさわしいと思えることを求め、上昇しようと模索し続ける。特権階級の者にとっては、下位の者が自分の立場を甘受し盲目的に服従してくれなければ、自分たちの快適な生活は成り立たない。ましてや、作品中でジェインがロチェスターに言い放つように、神の下では人間は平等だからという理由から、持って生まれた格差を批判するようになると、階級社会は根本から崩れてしまう。ジェインの、この一般大衆に蜂起を促すようにも取れる発言を批判する者も少なからず存在した。その代表格ともされる前述のエリザベス・リグビーは「この小説を書か

8 Ch.12, p.109; It is in vain to say human beings ought to be satisfied with tranquillity: they must have action; and they will make it if they cannot find it. Millions are condemned to a stiller doom than mine, and millions are in silent revolt against their lot. Nobody knows how many rebellions besides political rebellions ferment in the masses of life which people earth.

9 シャーロット自身、弟のブランウェルが、男であるというだけで、駅の職員になり、後には駅長にまでなっていて、はるかにつらい労働をしている自分より高い俸給を受け、優遇されていたことに強い怒りを感じていた、という事実がある。

10 Introduction, xiv.

せた精神は、権威を転覆させ、チャーチスト運動や反乱を助長するものと同じである」<sup>11</sup>と発言し、痛烈に批判している。しかし、同じ意味合いのことを肯定的な立場からとらえた者もいた。その1人、エレン・モアズ (Ellen Moers) は「彼女の想像力は、子供時代のジェーン・エアと同様に、「心中ひそかになぞらえる」ことによって刺戟されたのだ 自分の個人的状況と、圧迫に苦しみ謀反を起こしそうな他の階級や人種の人々とを」<sup>12</sup>と指摘している。

彼女は、ロチェスターと中流階級に属するブランシュ・イングラム (Blanche Ingram) は結婚するだろうと考えていた。ブランシュは、ジェインの立場についてどう考えていたのであろうか。それは、ブランシュの母の次の発言から読み取れる。「私は、骨相学の判断ができるのよ。あの子の顔には、あの階級の欠点がつぶさに表れているわ。」(強調は筆者) (Ch.17, p.177) つまり、この女性は、ガヴァネスをするような女性の階級は、自分たちとは接点の無い低い階級だと考えているのである。ガヴァネスは当時、中流階級に属する女性の中で、やむなく経済活動に従事しなければならなかった女性の受け皿となった職業である。教育を受ける側も、同じ階級に属する人物でなければ、自分たちの子女に教育を施してほしくないという要求があった。同じ階級に属していながらも、経済的格差により、低い立場であるとみなされ、ガヴァネスは、弱くあいまいな立場であったことがうかがえる。ブランシュも母親と同じような理解であり、それを裏付ける行動が描き出されている。彼女は、ジェインが、離れた部屋にいるロチェスターにワインを届けようと、ブランシュのいる居間でグラスに注いでいるのを見かける。その光景を、ジェイン自身がワインを飲むために注いでいるのだと誤解し、地位の低い家庭教師が自由にふるまうのは不愉快だと言わんばかりに顔をしかめる (Ch.20, p.204)。もう一つは、ジェインが休暇をもらう許しを請いにロチェスターに会いに行った時の場面である。ジェインは、自分に対するブランシュのまなざしを、強烈な比喩で描き出している。「私が近づくとブランシュは振り返り、高慢そうな目を向けた。その目はあたかも、這い回っている生き物が、いったい今頃何の用事があるっていうの、と言っている様であった。」(Ch.21, p.222)

しかし、そのガヴァネスが、ひそかに彼女の人間性を値踏みの対象とし、痛烈に批判しているなど想像も及ばない。ジェインは、ブランシュのことを階級的に高く裕福ではあっても、人間的、精神的に劣る存在であると判断している (Ch.19, p.185)。厳格に存在している「階級」をやすやすと飛び越え、言い放った言葉「ブランシュは嫉妬にも値しない人間である」(Ch.18, p.185) はジェインの「純粋に内なるプライド」(Ch.24, p.270) である。

ジェインは、雇い主ロチェスターの人間としての評価も、自分の目を通して下す。「次第に、私は主に対してとても寛大になっていった、彼の欠点をすべて忘れつつあった。」(Ch.18, p.187) 彼女は、ロチェスターの欠点を冷静に指摘し、その上で、許そうとしているのである。ここには、「純粋に内なるプライド」つまり自分の内面の美しさに対する自負と共に、熱い思いが存在する。それは、ロチェスターに対して断言した「あなたの心に話しかけているのは私の心です、それはまるで2人が墓を通り越し、神の足元に立っているように。平等なのです、わたしたちは。」(Ch.23, p.253) でありたいと願う気持ちである。

11 Judith O'Neill, *Critics on Charlotte and Emily Brontë*. (Florida: University of Miami Press, 1972) 15ページ参照。

12 エレン・モアズ, 青山誠子訳『女性と文学』研究社, 1980年, 29ページ。

与えられた地位に満足し、上の者に服従するという封建的な美德よりも、魂の気高さこそが人間の価値を決めるものである、と真摯に考えるジェインの態度がこの時代の抑圧された多くの人々から受け入れられたのであろう。さらに、この小説は大衆のみならず、当時の大作家サッカレーやヴィクトリア女王をも感激させた。階級を問わず多くの読者を熱狂の渦に巻き込んだのは、このヒロインの持つ「魂の気高さ」、「志の高さ」に他ならない。

『ジェイン・エア』という虚構の中には、現実のヴィクトリア時代を生きる人々の、声にならない声や気持ちが含まれている。作者シャーロットの自由な発想が描き出した虚構の中で、当時の社会情勢や人々の思いなどが複雑にからみあい、豊かな色彩を持つ彼女の代表作が出来上がったのである。このような分析をふまえて、『ジェイン・エア』がキリスト教からどのような影響を受けたかを第2章で考察する。

## 第2章 作品に見られるキリスト教

『ジェイン・エア』の作者、シャーロット・ブロンテの父パトリックは、ヨークシャー州ハワースで、1820年から1861年に亡くなるまで、英国国教会の副司祭を務めていた。アンを除いた4人の娘たちはすべて、ウィリアム・カールス・ウイilson牧師が創設した聖職者子女学校のカワン・ブリッジ・スクール (Cowan Bridge school) に入学した。この学校は、生徒たちに「カルヴィンの宗教的教えの脅迫によって信仰に駆り立て」<sup>1</sup>るような教育を施していた。この学校での体験をもとにして『ジェイン・エア』のローウッド学院の描写が生まれたのである。第2章では、キリスト教に関連した時代背景と絡めて、小説の中の人々の宗教観やその行動を考える。さらには、熱烈なプロテスタントであったシャーロット自身の宗教に対する考え方を小説の中から読み解きたい。

### 第1節 カルヴィニズムの影響

ジェインは子供の頃、時々聖書を開き、自分の気に入った黙示録やダニエル書などを読んでいた。しかし、初めて本格的にキリスト教と出会うのは、プロクルハースト師に会った時である。

ジェインに会ったプロクルハーストは、彼女が詩篇を面白くないと言ったことに対して、「その言葉が、君がよくない心の持ち主であることを示している」(Ch.4. p.33)と決め付ける。そして、悪い子は地獄に落ちるのだと言い、その恐怖でジェインの心を宗教に縛りつけようとする。しかし、彼の「地獄に落ちないようにするにはどうすればよいか」という巧みに仕込まれた罠のような問いに対して、ジェインは熟慮の末に答えを引き出す。彼女は「健康に気をつけて死なないようにしなくてはなりません」(Ch.4. p.32)と答えたのである。

この問いと答えは、プロクルハーストとジェイン、2人の宗教における方向性の違いを際立たせている。プロクルハーストの考える宗教は、恐怖で人心を信仰に繋ぎ止め、形式を重視し、表面の信仰心を要求するものである。これに対し、ジェインは素直に神を敬愛している。彼女

1 中岡 洋 『ブロンテ姉妹 その知られざる実像を求めて』NHK 出版、2008年、65-66ページ。

には、神の裁きに対する恐れやそれを避けるための便宜的な信仰心などなく、純粹に神と自分との関係を切り拓いていこうとするひたむきさが見られる。長じてからの行動を見ればわかるとおり、現実を直視し、その中で人の心にも神の御心にも沿った道を模索しようとするのである。

牧師であるプロクルハーストの心の中のキリスト教は形骸化している。そのことは、「お菓子をもらうよりも天使が歌う詩篇を覚えるほうがいい」と口先だけで信心深さを示す男の子 (Ch.4, p.33) をほめたたえていることから理解できる。また、彼は学院では「肉体の飢えにパンを与えることで、かえって魂を飢えさせることになる」とか「この世の肉体の欲望を抑え、つつましくすべし」などと唱え、学院生には耐えがたいほどの窮乏を強いている。その反面、家族には「.....ベルベットや絹や毛皮で立派に」(Ch.7, p.64) 着飾らせている。彼は、自分の言葉に矛盾を生じていることを何とも思わず、都合のいいように宗教を取り込むエゴイストである。

このプロクルハーストは、キリスト教の中のカルヴィニズムを信奉している。彼の「この子は選ばれた若木の育苗園に入ります。彼女はそこで、神による選択の計り知れない恩恵に浴することに感謝するでしょう」<sup>2</sup> (Ch.4, p.35) という言葉の中の「選ばれた」、「神による選択」という表現は、カルヴィニズム思想の表れである。しかし、彼には、キリスト教に即した良い教育者でありたいという気持ちは無い。それは、新しい環境で精いっぱい努力しようと意欲に満ちたジェインの希望の芽を摘み取ろうとすることに現れている。ジェインは、彼のことを「黒い柱」(Ch.4, p.32) とか「黒い大理石でできた牧師」(“the black marble clergyman”) (Ch.7, p.66) と表現している。およそ人間を表現するにはふさわしくないこの言葉は注目に値する。

ジェインは、このカルヴィニズムの教義にモートンの地で再び出会う。彼女は、牧師であるセント・ジョンが、カルヴィニズムの教義を説くのを聴き、次のような気持ちになる。

彼が説教を終えた時、その話によって気分がもっと良くなるとか、心が落ち着くとか啓発されるということではなく、言葉にならない悲しさを感じた (Ch.30, p.352)

このように自分と心の通い合わないセント・ジョンの説教は、ジェインの心を安らかにして希望をもたらすことはなく、聞く前よりもかえって彼女の心を暗くするのである。さらに、聡明な彼女は、説教している彼自身も、宗教によって未だ心の平穩を手にはしていないと感じとっている。

希望も心のやすらぎも見いだせないセント・ジョンの教義と、恐怖で人々の心を縛り付けようとする利己主義者のプロクルハーストの教義のありようは、どちらも、ジェインの考え方は相容れない。それは、彼女が友人のヘレンから、宗教というものは心に安寧をもたらすと教えられ、その宗教観の影響を受けているからである。ここには、作者シャーロット自身の宗教に対する考えが描き出されている。彼女は、友人のエレン・ナッシー (Ellen Nussey) への1836年の手紙の中で次のように述べている。

2 “...she shall be placed in that nursery of chosen plants - and I trusted she will shew herself grateful for the inestimable privilege of her election.”

もしカルヴィニズムの教義が事実ならば、自分はすでに神に拒絶されている..... 神聖なものは絶対に私の手には入らない..... 私の心は信じられないほどの罪深い考えの温床となっているから魂の救済にキリスト教徒としての完璧さが必要なのであれば、私は決して救われることはないだろう<sup>3</sup>。

セント・ジョンは、インドでの布教活動の手伝いをさせるために、ジェインと愛のない結婚を考える。そのような結婚がジェインにとっては苦痛でしかないことが、彼には理解できない。彼女は、自分の心に生じた葛藤に苦悩し、次のようにそれをはねのけようとする。

彼が私に授ける愛情のすべてが、信念に基づいた犠牲なのだ、という意識に耐えられるだろうか。いいや、そのような苦痛は不条理だ (Ch.34. p.405)

セント・ジョンは、神からの愛と人からの愛の両方を望むことは愚かしいことであると考えている。プロクルハースト同様、神の名の下に、ジェインに犠牲を強いようとするエゴイストであるといえる。

彼は伝道の助手を望んではいるが、妹や助手ではなく、あくまで誰の眼から見ても奇異に映らない妻という立場の助手を望むのである。心の底から、布教活動に従事したいと思っているのであれば、ジェインという有能な助手を伴ってインドに行けばよい。妻を伴ってインドで布教活動を行いたいのであれば、愛するオリヴァー嬢と結婚した後で、インド行きを説得すればよい。しかしセント・ジョンの選択は、そのどちらでもない。彼の選択には、純粋に布教活動に従事したいという熱意とは相容れない不純なもの、つまり他人の評価とか体裁を気にするまがいのものが含まれている。神へとつながる道を歩いていく過程で、自分が犠牲にしてきたものの大きさを神に示したいという意図が透けて見えるようである。神山妙子は、これを「セント・ジョンの偽善性」<sup>4</sup> と指摘し、次のように述べている。

ジェインが彼の冷たさを非難するのは、生まれつき人間的感情が欠乏しているからというよりも、宗教的使命という大義名分を振りかざして感情の抑制を美化しようとする彼の姿勢によるところが大きい<sup>5</sup>。

彼は、人間らしい感情を押し込め、美しいオリヴァー嬢の魅力は、神から自分を遠ざけようとする甘美な毒である、と考えているのである。人間的な愛情や暖かい家庭での安らぎを断固拒否し、それを退けた後に「ほら、私は戦いに勝利したでしょう」とジェインに告げる (Ch.34. p.396) セント・ジョンのかたくなさ、彼の言葉の虚しさは印象に残る。彼を形容するジェインの表現は、「冷たく扱にくい、陰鬱で場違いな柱」(a cold cumbrous column, gloomy

3 日本語は加塩訳。“if the Doctrine of Calvin be true I am already an outcast ...longing for holiness which I shall *never*, *never* obtain...If Christian perfection be necessary to Salvation I shall never be saved, my heart is a real hot-bed for sinful thoughts...” pp.481-82, note 352. *Letters*. see p.41.

4 神山妙子『愛と結婚 イギリス小説の場合』星雲社、1989年、84ページ。

5 神山、前掲書、84ページ。

and out of place) (Ch.34. p.393) である。

シャーロットは、プロクルハーストとセント・ジョンの2人を人間の温かい心を持たない石の彫刻に例えた。これは、エレン・ナッシーへの手紙に吐露された心情のとおり、2人が信奉するカルヴィニズムに対する嫌悪感が反映されたものに違いない。それと同時に、カルヴィニズムでは自分は救われないという絶望感が、自分を悩ます、重く圧迫感のある「柱」という比喩表現に含まれているようである。

## 第2節 ヘレン・バーンズの宗教観

ローウッド学院でのジェインの友人、ヘレン・バーンズの死生観や宗教観は独特である。彼女は、「すべての人は肉体が滅んだ後でも光り輝く魂は残る、人間から悪魔などに退化することはない」(Ch.7. p.59) と考えている。ヘレンにとってキリスト教は「教義と言うよりも体で本能的に覚えているものであり、彼女はいわば生まれつきの聖女であり天使である」<sup>6</sup> と指摘する研究者もいる。

彼女の信条は、「明らかに犯罪者とその人が犯した犯罪そのものとを区別することができる」(Ch.7. p.59) という考えの中に表現されている。この「万人救済」(Universal Salvation) の考え方は、とりもなおさず作者シャーロットの信条でもある。彼女はマーガレット・ウラー (Margaret Wooler) への手紙の中で、次のように述べている。

牧師たちが、万人救済の教義を気に入らないのは残念です。そのことは、あの人たちにとって哀れむべきことです。でも私自身が真実であると信じている概念を、否定したりやめさせたりできると考えるほど、無分別な人たちではないことは確かでしょう<sup>7</sup>。

前節で見てきたように、自分は罪深いという意識にさいなまれていたシャーロットは、カルヴィニズムでは自分は救われないと感じていた。しかし、万人救済の教義ならば、自分も、さらにはアルコールや薬物で破滅への道を歩いて行った弟のプランウェルさえも、生前自分は弟を嫌ってはいたものの、死後は神が分け隔てなくお救い下さるだろうと考え、心の平安を感じることができたのかもしれない。

ヘレンは、「神の力に絶対的な信頼を寄せ、神の善良さを全面的に信頼している」(Ch.9. p.81) と言い、死の床にあっても迷いが無い。ヘレンの宗教観は、神と人間との関係を心の中で最大限にまで浄化したもの、と言えるかもしれない。この高い宗教性について、内田能嗣はキリストのイメージと重ねて次のように述べている。

テンプル先生がヘレンを抱きしめている場面は、まるで聖母マリアがまもなく神に召されるわが子イエスを抱きしめているかのように思われる。なぜならヘレンの墓碑銘は「我は復活すべし」であるからだ<sup>8</sup>。

6 神山, 前掲書, 83ページ。

7 日本語は加塩訳。"I am sorry the clergy do not like the doctrine of Universal Salvation; I think it a great pity for their sakes, but surely they are not so unreasonable as to expect me to deny or suppress what I believe the truth!" p.464, note59. See *Letters*, p.264.

8 内田能嗣編 『ヴィクトリア朝の小説 女性と結婚』 英宝社, 1999年, 24ページ。

### 第3節 ジェイン自身の信仰

ブロクルハーストとの面談の後、ジェインは、死後地獄で業火に焼かれるかもしれないという恐怖よりも「この子は嘘つき」と性格をねじ曲げて彼に伝えられたことに、激しい怒りを抱く。換言すれば、生きていくうえで理に合わないと感じたことに向けられる感情の爆発である。彼女の視線は、神の世界にではなく、人間世界に向けられている。

ジェインの信仰は、ヘレン・パーンズのように、この世界の出来事を超越し、ひたすら自分と神のみの関係を築き上げていこうとする信仰態度とは一線を画す。彼女は、神の意に添う人間になりたいという願望と、人を愛したいという気持ちや理不尽なことには我慢ができないという人間らしい感情とを併せ持っているのである。ヘレンが感じることのできない深い怒りに打ち震え (Ch.9. p.74)、彼女から人への愛情にそれほど重きを置いてはいけない、とたしなめられても、次のように自分の考えを変えることはない。

あなたやテンプル先生や、心から愛する他の人の真の愛情が得られるのならば、私は腕の骨を折られようが、雄牛の角でほうり上げられようが、蹴る癖のある馬の後ろに立たされようが、その馬が、ひづめで私の胸にぶつかってこようが、喜んでそれを受けるわ。  
(Ch.8. p.69)

ここにヘレンの思想とは異なる、彼女の人間の「生」を肯定した人生観がある。人間の愛情を重視するジェインの熱い思いが、子供らしいたとえで語られている。さらに、この言葉は、内田が分析しているように「ジェインにとっては、肉体的苦痛よりも精神的苦痛の方が大きいことを意味していて、このような肉体的苦痛を取り上げることで、逆説的に小説後半のジェインの精神的苦痛の重要性の伏線を張った」<sup>9</sup>とも考えられている。

成長してからのジェインは、常に神を絶対的な存在としてあがめ、全幅の信頼を置いている。彼女は、人間は時として間違いを犯す存在であるということに気付いている。雇い主であるロチェスターに対しても、「人間や過ちを免れない存在は、神聖で完全なる存在のみに安全に委ねられている力を不当に要求すべきではありません」(Ch.14. p.138)と、宗教を心のよりどころとするように諭している。ジェインの心の中では、常に神への感謝や祈りが最優先され、この真摯で敬虔な態度をもって、自分と神との良好な関係を築いていたのである。

しかし、ジェインと神との関係を遮る存在が現れる。それは、次の箇所からわかるように、ロチェスターとの婚約期間中のことである。

未来の夫は、私にとって全世界であった。全世界以上の存在であった。ほとんど至福の場所での希望であった。彼の存在が、私と宗教のあらゆる思念との間に立ちはだかった。それはあたかも、人間と、光が満ち満ちた太陽との間をさえぎる日食のようであった。最近神が作り出した人間、私が彼を偶像にしてしまっていたのであるが、その彼が原因となり、私は神を見ることができなくなっていた。(Ch.19. p.274)

9 内田、前掲書、23ページ参照。

ここでジェインは1人の人間をあまりに重視し、神と自分との関係を崩してしまったことが理解できる。永遠で絶対的存在としての「神」ではなく、一時的な存在であり間違いを犯しやすい「人間」を何よりも優先させ、それ以外のものは目に入らなくなってしまったのである。シャトルワースは、解説の中で「ワット牧師は、我々は人間より神を、肉体より魂を、一時的なものより永遠のものを好まなくてははいけない、と警告」<sup>10</sup>する点を強調している。その後ジェインの身に起こる不幸は、それが原因で神が下した罰ととらえることもできる。

その後、耐えがたい別離と辛さの中でソーンフィールドを抜け出したジェインは、荒野を放浪し大自然の中で、再び神に祈り感謝を捧げる。自然の壮大さの中に神の普遍性を悟るのである。彼女はロチェスターのために祈り、神は自ら作り出したものをお救い下さる、彼の魂は大丈夫だという思いに行き着く (Ch.28. p.324)。この描写から、ジェインは再び、神との関係を修復できたことがわかる。

生死の境をさまよひ、かろうじてセント・ジョンに助けられたジェインは、彼の妹たちとは親しく話せるようになるが、彼とはあまり打ち解けることができない。しかし、彼と結婚してインドへ行くことが可能な気がしてきたのは、彼の宗教に対する圧倒的な熱意や彼を純粹に尊敬する気持ち、またジェイン自身の心の中にある愛情より義務を優先させようという気持ちによって共感を抱いたからである。セント・ジョンとぎこちなく対峙しているジェインには、ロチェスターと一緒にいる時の自由闊達な会話の伸びやかさは見られない。ジェインは彼を、尊敬し怖れるあまり、本来備えていた情熱的で強い自我が、完全に閉じ込められてしまったのである。この場面からは、ジェインを自分の教義に引き入れようとするセント・ジョンの強い精神的な働きかけがあったことがわかる。

しかし、セント・ジョンとの結婚を承諾する直前に、愛していない人と結婚する「判断の間違い」(Ch.35. p.418)から彼女を救い出したのは、神を信じていない、言うなれば神から見放された人物の声である。ロチェスターの絞り出すような悲痛な叫び声は、ジェインの心の奥に閉じ込められていた自我を呼び覚ます。彼女は、自分自身に対する支配権を取り戻し (Ch.35. p.420)、セント・ジョンから離れ自分の部屋に戻る。この彼女の態度は、作品内において次のように描写される。

私は自分の部屋に入り、鍵をかけて閉じこもった。ひざまずき、自分なりのやり方で神に祈った。——セント・ジョンとは異なったやり方 (強調は筆者) だが、自己流で効果がある。(Ch.35. p.420)

この描写はジェイン自身の信仰がセント・ジョンの信仰の影響から離れ、自分が独自に築いてきた信仰、宗教観に立ち戻ることができたということを示唆している。セント・ジョンの近くにいた時には意識に上らなかったが、自我が呼び起こされた後に、以前と同じ罪を犯しそうになっていたこと、つまり自分自身を見失い、神とのかかわり方が見えなくなっていたことに気づくのである。これらの出来事を通して、彼女が成長していくとともに、自身と宗教のかか

10 日本語は加塩訳。Watts warns that 'We must prefer God above creatures, the soul above the body, eternal things above temporal' ( p.476, note 274).

わりが次第に明確になってきたことがうかがえる。

この章では『ジェイン・エア』の作品の様々な登場人物の宗教観を検証した。そしてここでは、作者自身の人生と宗教との関わり方が深く関連していることが明白になった。自分は罪深い存在であるという意識を持っていた作者は、主人公をヘレン・バーンズと出会わせる。そして、宗教とは心に安寧をもたらすものであるという考え方に導く。プロクルハーストやセント・ジョンとの関係においては、信仰篤き人々の心の中の不純なものを明るみに出した。これらのことは、牧師の家に育った作者の、自分と神とのより良い関係を求め続ける純粋さゆえに、可能になったのである。だからこそ、当時の社会と宗教が、『ジェイン・エア』という虚構の中に現実味を帯びたまま存在することができたといえる。

### 第3章 精神疾患と神秘性

『ジェイン・エア』においては、気が狂いゾーンフィールドに監禁されたロチェスターの妻、バーサ (Bertha Mason) が登場する。シャーロットは、このバーサの狂気の描写について、次のように述べている。

彼女の墮落した有様は、人の心に深い憐みの感情のみを生じさせるべきであることは、間違いありません。私がこの作品の中で、十分にその感情に取り組んでないのも、同様に事実です。“恐怖”をあまりにも前面に押し出した描き方をしたというミスを犯してしまいました<sup>1</sup>。

今の時代ならばあり得るはずもない、凶暴な狂人を自宅で監禁するというのも当時としてはそれほど特異なことではなかった<sup>2</sup>。その上、精神病患者を収容し治療する病院はその数が絶対的に不足していた。作者シャーロットにとっても、精神疾患は身近なものであり、『ジェイン・エア』の狂人の描写は、単に想像力の産物ではないことが知られている。さらに「1845年には精神病患者の扱いを定め、州の精神病院の創立に関する法律 (Lunacy Acts) が制定される」<sup>3</sup> ことからわかるように、次第にこの時期を境にして、精神疾患に対して社会全体がそれまでとは異なった接し方をするようになった。患者を人間として扱う大切さを重視する傾向が強まってきたのである。

1 日本語は加塩訳。Introduction, xix. T.J. Wise and J.A. Symington, eds. *The Brontës: Their Lives, Friendships and Correspondence* ii (Philadelphia: Porcupine Press, 1980).

pp. 173-4. “It is true that profound pity ought to be the only sentiment elicited by the view of such degradation, and equally true is it that I have not sufficiently dwelt on that feeling; I have erred in making *horror* too predominant.”

2 ソーンフィールドのモデルとなったのは、ノートン・コンヤーズ (Norton Conyers) とノース・リーズ・ホール (North Lees Hall) であろうと言われている。どちらの家にも気が狂った妻が監禁されているという評判があった。シャーロットはノース・リーズ・ホールの最初の女主人アグネス (Agnes Ashurst) が、気が狂ったようになり、2階の壁一面が緩衝材で覆われた部屋に閉じ込められていて、最後には火事で亡くなったという話を見聞きしていた。(p.478, note 292)

3 Chronology 1.

ここではまずクレオールをひくパーサを中心に、当時の精神的疾患に対する考え方と社会の対応を考察する。次には、ヴィクトリア文化の全盛期にもてはやされた「骨相学」や『ジェイン・エア』に独特の雰囲気醸し出している現実離れした事象について述べてみたい。

### 第1節 パーサ・メイスンとその一族

ジェインとの結婚式が中断され、パーサのことが明るみに出された後、ロチェスターは皆に向かって次のように叫ぶ。

パーサ・メイスンは気が狂っている。あの女は精神病を血筋に持っている家系の出だ。3代にわたる精神薄弱と狂人の一族だ！ 母親はクレオールで、気が狂っていて、大酒飲みだ。(Ch.26, p.292)

続いて、パーサの兄についても言及し、「あいつも、たぶんいつの日にか、同様の状態になるであろう」(Ch.27, p.305)と述べている。サリー・シャトルワースは、この発言が当時の社会では一般的な考え方であったと考え、次のような事例を根拠として挙げている。

当時の作家トーマス・トロッター (Thomas Trotter) は、1809年に自分の本の読者に対して次のような警告を発している。イギリスの男性はクレオールの女性たちとの交際を避けるべきである、そうしないとイギリスはクレオールたちの影響を受けて奴隷と愚か者の国になってしまい、侵略を受けやすくなってしまふからだ、というのである。それというのも、当時、クレオールは贅沢な暮らしが原因で徐々に劣った体質になっていくものと考えられていたからである<sup>4</sup>。

クレオールとは、ヨーロッパ人とアフリカ黒人との混血児や西インド諸島に移住した白人の子孫を指す。当時のイギリス社会では、狂気に蝕まれるのもクレオールであることが原因だと思われていた。

なぜこのような考え方が社会に広く流布するようになってしまったのか。パーサの父親は、ジャマイカで広大なプランテーションを持ち、大金持ちであった。おそらくはトーマス・トロッターが表現するように「贅沢な暮らし」ができる境遇であったろう。しかし、クレオール自身の民族としてのアイデンティティーは存在しない。土着の人々に比べて、異国が出自である彼らには、世代を超えて受け継がれた文化とか精神的に拠って立つバックグラウンドは無いに等しい。その上、地元ジャマイカの人々とイギリス本国の人々の両方から異質な存在として考えられていたことが容易に理解できる。帰属すべき確固とした社会を持たない「弱者」であるがゆえに、彼らは、ロチェスターやトロッターなど、強い社会を背景に持つ発言者の、誤解を含んだ独断に反論する機会さえ与えられなかったのである。この小説のパーサに至っては、登場した時にはすでに病気にむしばまれ、自分の人生を語る言葉さえ持っていない。女主人公ジェ

4 p.478, note 292.

インの美德を際立たせるという使命を帯びた、見る人たちに嫌悪と恐怖を感じさせる存在である。

小説内でのパーサは、あたかも凶暴な野獣であるかのように印象付けられ、誰に対しても攻撃的で危険な存在である。ジェインは、パーサのことをあしざまに言うロチェスターに反論する。彼女は、自分の結婚の望みを断ち切り、精神的に立ち直れないほどの打撃を与える原因となった狂女、パーサを次のように弁護するのである。

.....あなたは、あの不幸な女性に対して冷酷です。彼女の話を話す時、憎悪の念や悪意のある嫌悪感をお持ちです。むごいことですわ。彼女が狂ってしまうのも、当然です。  
(Ch.27, p.301)

ジェインは、パーサの狂気はクレオールである母から受け継いだ遺伝というより、結婚後にロチェスターからむごく扱われたことが原因で、狂気に至ったと判断しているのである。冒頭で述べたシャーロットの手紙の言葉を借りるならば、ジェインはパーサの姿は「人の心に深い憐みの感情を生じさせる」光景である、と考えていることが読み取れる。

ロチェスターは、ジャマイカに住んでいる時から、パーサは狂っていたと発言しているが、果たしてそれを言葉通り受け取るべきか否かは疑問の余地がある。そこには、国ごとの文化の違いが考慮に入れられていないからである。伝統や格式を重んじ、家父長制度が確立されていた厳しい封建社会のイギリスに比べると、規則や慣習による締め付けが緩やかなジャマイカでは、熱帯に位置することもあり、肌を露出することも多く、酒を飲み、ダンスをしたり歌ったりすることも多かったはずである。ロチェスターは、カリブの文化や生活様式を尊重することもなく、自国の尺度で物事を判断しようとしたのではないだろうか。このような意識には、彼をはぐくんだ大英帝国の白人文化至上主義が明白に現れている。パーサの狂気の発現について、デボラ・ティーチマンは著書の中で、次のように2つの可能性を指摘する。

(パーサは) ヴィクトリア朝の立派な女性のふるまいの標準に合わなかったことが、狂っているとされたのかもしれない。もし結婚前にロチェスターより賢い人間がパーサを見たら狂気の兆候が現れていたかどうか不明である<sup>5</sup>。

意志に反して文化も気候もカリビアン諸島と異なるイギリスに連れて来られて、もしそれまで精神的な不調和が重くなければ、この移動が彼女を狂わせたという可能性もある<sup>6</sup>。

ジェインは、かつてリード夫人に向かって怒りをあらわにしたことがあった。その時のことを夫人は「ジェインは昔、私に向かって気が狂った人間か悪魔のような口のきき方をしたことがあった」(Ch.21, p.231) と語っている。ジェインにとっては、パーサの姿は、狂気に駆られたように怒りを爆発させた少女時代の自分のように映ったのではないだろうか。それが、この

5 日本語は加塩訳。Cf. Debra Teachman, *Understanding Jane Eyre* Westport : Greenwood Press, 2001. p.18.

6 Cf. Teachman, *ibid.*, pp. 17-18.

ような仕打ちを受けたら気が狂うのも当然である、という発言につながったと考えられる。

一見したところ全く異なるこの2人の人物は、見方によっては、ポジとネガのような存在、いうなれば鏡に映る反転した自分の姿のような役割を果たしている。ロチェスターと婚約する前のジェインは、ゲーツヘッドやローウッドで見せたような熱い心や自我を極端なまでに抑えこんでいる。渡辺千枝子は、この抑え込まれた自我をジェインに代わって表現する人物がパーサである、と指摘し次のように述べている。

異常なまでに嫉妬深くかたくなで反道徳的なパーサは、ジェインがこれまで無意識に抑圧してきた方の、心の深層にひそむ衝動的な感性、欲望を体現した自我人格、ドッペルゲンガーなのである<sup>7</sup>。

ロチェスターは狂人と化した自分の妻に、嫌悪の念を抱いている。これに対しジェインは、彼女に憐れみの感情を抱いている。この2人の考え方の違いは重要な意味を持っている。18世紀には狂人 (lunatic) は不治の病とされていた。しかし、19世紀に入り、新しい考え方が台頭してきた。それはミシェル・フーコーによると「もはや狂人は……分割された空間における気違いではなく、病気という近代的形態における錯乱者なのである」<sup>8</sup> という考え方である。不治の病から病気、つまり適切な治療によって治る可能性のあるものとみなされるようになってきたことを物語っている。このような考え方を受けて、1796年にウィリアム・テューク (William Tuke) は、「ヨーク隠退施設」(York Retreat) を創設した。ここは「狂人を肉体的罰則や拘束によって制御するのではなく、もっと人道的に扱う」<sup>9</sup> 療養所であった。ロチェスターは、パーサの症状を不治の病と考え、拘束という処置をとった。これは18世紀の考え方である。これに対しジェインは、パーサに共感し同情している。これは、狂人を病気にかかった患者と考える19世紀の考え方である。

パーサの狂気に対してロチェスターは2つの理由を挙げている。「彼女の母親はクレオールで、狂っていて大酒のみだった」(Ch.26, p.292) や「3世代にわたる馬鹿と狂人の家系だ」(Ch.26, p.292) という言葉からわかるように、1つめは遺伝的な要因である。そしてもう1つは、不摂生や不行状に起因する後天的な要因である。作品においては、「彼女の不摂生が精神疾患の要因の発育を速めた。」(Ch.27, p.306) と述べられている。

遺伝として受け継いだものは本人に責任を負わせることはできない、しかし自堕落な生活でそうなったものには本人に責任がある。ジェインはパーサの狂気のもつ遺伝的要因には共感し憐れみを感じながらも、「大酒のみで貞淑でない」(Ch.27, p.306) という後天的要因には批判的な感情を抱いている、というアンビバレントな意識を持っていたことがうかがえる。さらには、『ジェイン・エア』のストーリーによく似た出来事が、当時現実に起こった<sup>10</sup> ことも記録に残っている。

7 渡辺千枝子『『ジェイン・エア』の成功の秘密：ドッペルゲンガー (Doppelgänger) の探求』、『水の流れに：松浦暢教授古稀記念論集』(松浦暢教授古稀記念論集刊行委員会) 所収、2000年、62ページ。

8 ミシェル・フーコー、田村俣訳『狂気の歴史 - 古典主義時代における -』新潮社、1984年、549ページ。

9 See Introduction, xx.

10 リーズ近郊の家で働いていた家庭教師がある紳士と結婚し子供を1人もうけたが、後になって紳士にはすでに気が狂った妻がいることが判明した、という事件が発生した。これは、シャーロットが、ミス・ウラー (Miss Wooler) の学校、ローヘッド (Roe Head) で助教師として働いていた頃のできごとである。(Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë*, [London: Penguin Books, 1997] Cf. p.105.)

## 第2節 作品と骨相学

骨相学は、オーストリアのフランツ・ジョセフ・ガル (Franz Joseph Gall) によって提唱され、イギリスのジョージ・クーム (George Combe) によって有名になった19世紀の科学的な考え方である。この考え方では、頭蓋骨の形状を「読む」ことでそれぞれの器官の大きさや才能がわかるとされた。

シャーロット・ブロンテが、一時期骨相学に傾倒していたこともあり『ジェイン・エア』の中にも様々な場面で、骨相学が登場する。なかでも額の形、大きさについての言及は多い。骨相学で見ると「広い額」をもつのは知的に優れた人間の象徴である。作品の中では、次のような表現で登場人物の知性や性格を判断する根拠となって現れる。

ロチェスターの額は「知的器官の不足のないがっしりとした集合体」(“a solid enough mass of intellectual organs;” Ch.14, p.131) と表現されており、この表現だけで彼が知的な人間であることが理解される。また、「高い額」(“high forehead” Ch.29, p.345) を持つセント・ジョンや「広い額」(“large front” Ch.5, p.47) のテンブル先生も同様に知性に優れた人物であることがわかる。

彼らと対照的に置かれているのは、ジェインがあまり快く思わない登場人物である。リード夫人については「額が狭い」(“...her brow was low” Ch.4, p.35) と表され、あまり知性に優れた人物ではないことが理解される。ほかには、グレイス・プールの「頑迷そうな額」(“hard forehead” Ch.16, p.153) やブランシュ・イングラムとその母親の「似たような狭い額」(“the same low brow” Ch.17, p.172)、リチャード・メイスンの「狭くて平べったい額」(“the low, even forehead” Ch.18, p.190) などである。これらのことからわかる様に、彼らの額は、ロチェスターたちの額と明確に対比されている。作者が、骨相学の観点から、内面的に劣っている人々を「科学的」に描写しようとしたことが見て取れる。

他の場面では、ジェインがロチェスターの頭の形からその性格を判断する場面がある。ここでは、彼は知的ではあるが「仁愛の温かい感情を表す場所が唐突に欠落している」(“an abrupt deficiency where the suave sign of benevolence should have risen.” Ch.14, p.131) と判断する。読者は、この表現からロチェスターの性格がわかると同時に、次のように予想するのではないだろうか。おそらく彼は、生まれつき他の人に対して温かい心を持たない人間ではないだろう。なにか過去のつらい経験で、そのような感情を失ってしまったに違いない。それゆえ、先を読み進めてその理由を知りたい、という気持ちを抱くであろう。ジェインの、ロチェスターに対するこの判断は、その後起こる様々な出来事の伏線となっていることは言うまでもない。

このように、小説の中で骨相学は、主観的な人物評価に対する客観的で理論的な裏づけとして用いられている。それにより作品に独特な味わいが加わり、読者をひきつける魅力になっているのである。しかし中岡洋は、作品の中で骨相学を用いる欠点について、次のように指摘している。彼によると、骨相学は「シャーロットの人物造形を型にはまったものにしてしているような印象を与え」<sup>11</sup> ている、というのである。彼女の複数の作品の登場人物同士が、似た頭の形や鼻の形、顎などを持っているならば、おおむね似た性格の持ち主であろうと想像がつく。こ

11 中岡洋 『シャーロット・ブロンテ論』開文社出版、2001年、62ページ参照。

のことが逆に、彼女の作品には、ある種パターン化されたものがあるという印象を読者に抱かせてしまう。ここに骨相学を重要視し、作品中の人物構成に用いたことの欠点が指摘されるかもしれない。

さらにもう1つの注意点は、骨相学が当時もてはやされた理由である。当時は「科学的人種差別主義」の根拠として利用されていたのである。白人の優越性を強調するために、骨相学は人類学、人種学などと共に用いられた。頭蓋骨から判断した白人の優越性は、非白人の劣等性の根拠となり、帝国主義下の大英帝国が自らの植民地政策を正当化し、世界へ乗り出して行った原動力となった。世界を「文明化」するのが自国の使命であると考えられるようになったのである。

文学作品には、その時代を映し出す鏡であるという側面がある。登場人物の外見を詳細に描写することによって、写真を見るように鮮明なイメージを与えることができる。それと同時に、当時、一般的に流布していた骨相学の判断を小説の中に用いることによって、作者と読者の間には、登場人物の性格に対する暗黙の共通理解が生まれる。その「決まり事」の中で、思いもかけない方向へと進んでいく物語に読者は魅了されるのである。時代感覚に沿ったストーリー展開と共に、この時代を象徴する骨相学を巧みに取り入れていることがこの小説が多くの人々をひきつけた理由の1つである。

### 第3節 『ジェイン・エア』の中の「月」

一般的にアングロ・サクソン人が現実的なのに比べて、シャーロットの祖先であるケルト族はロマンチックで豊かな想像力や激しい情熱、よどみない雄弁などを持っていると考えられている。また、彼女たちが育ったヨークシャーの環境は、彼女たちの中に「実際の堅実な生活態度や強い責任感、気難しいまでの禁欲的態度を養った」<sup>12</sup> と言われている。このケルトの血とヨークシャー気質は、『ジェイン・エア』全体を通して、女主人公の性格を貫く精神的支柱となっている。

さらに、アイルランドの伝説のように幻想的な雰囲気はこの小説の特徴の1つでもある。月を例に挙げるならば、この小説の重要な場面では、月と関連のある様々な描写が出てくることに気付く。主人公が初めてロチェスターに会う場面でも月が出ていた (Ch.12, p.111)。また、結婚の希望が断られたジェインの夢の中に現れ、「娘よ、誘惑から逃れなさい」 (Ch.27, p.319) と話しかけ、ジェインを正しい選択へと導いた場面も、月と関連があった。また本来ならば、聞こえるはずもないロチェスターの声が、セント・ジョンの手からジェインを救い出した時も、部屋の中は月の光で満ち溢れていた (Ch.35, p.419)。

「精神異常」を意味する“lunatic”は、「月」を表す“Luna”に由来することからわかるように、かつては月の光を浴びると狂ってしまうと考えられていた。ここに挙げた3つの場面は、いずれも現実離れた神秘的な印象を残す場面である。作品全体に漂う、独特の幻想味を帯びた色彩もこのようなところから生じてくるのであろう。デボラ・ティーチマンは、ジェインの心と月の光を関連付けて、「土着の言い伝えでは、心の奥底の感情の深さと月光は関係がある

12 青山誠子『ブロンテ姉妹』清水書院、1994年、12-17ページ参照。

と考えられている<sup>13</sup>と述べている。最後の場面で部屋を満たした月の光は、ジェインの激しく深いロチェスターへの愛情の現れかもしれない。さらに月の光の中は、人を狂人へと導く、現実とは切り離された非現実的な場とされている。ロチェスターへのあふれんばかりの愛情と現実から切り離された異空間、この2つが交わったことで、現実にはあり得るはずのない遠く離れたロチェスターの叫びをジェインに届けることができたと考えられる。

第3章では、パーサ・メイスンに関連して精神疾患と当時の社会や、この作品全体から醸し出される独特の神秘的な雰囲気について検証した。作者が受け継いだ気質や生まれ育った環境、当時の出来事が作品の中に強く反映されていることが見て取れる。

また、狂気に関して人々の意識が次第に変わりつつあった時代であったことが理解される。

第1章、イギリス社会と『ジェイン・エア』では、当時のイギリスは、産業革命や植民地政策により、めざましく成長を続けていた半面、労働者の待遇や女性の地位、教育問題など多くのひずみを内包し、それらが目に見える形で次第に現れつつある時代であったという特色に目を向けた。その時代の人々がこの小説に共感し、大きな反響を巻き起こした理由を、作品中から読み解いた。作者が社会全般に対して感じていた怒りや不満の原因が、作品を通して明らかになった。

次の第2章、作品に見られるキリスト教では、牧師の娘として育ったシャーロットの宗教観を、作品中の様々な登場人物の生き方を通して探った。作中の、万民救済の考え方やカルヴィニズムに関する描写から、それぞれの宗教に対する作者の精神的距離を読み解くことができた。彼女の実際の往復書簡などをもとに、宗教との関わり方を模索し、心の平安を求め続けたその死生観が明確にされた。

そして第3章、精神疾患と神秘性では、登場人物の一人、パーサ・メイスンに光を当て、彼女が患っていた精神疾患に対する当時の考え方を探った。イギリス人にとって、ジャマイカに代表される異文化の地は、「文明化されていない未開の地」であった。それを文明化することがイギリス人の使命であると考え、植民地政策を推進してきた事実が明らかになった。さらに、作中に用いられた骨相学と帝国主義の関連性を指摘した。また、この作品全体に漂う非現実的な雰囲気を、作者の持つ民族的特質や環境と結びつけて論じた。

書くことが好きで、生計を立てる手助けをしたいという姉妹の動機から一連のプロンテ文学が始まった。その中でも、姉を次々と亡くし、自ら一家を支えなくてはならないと、人一倍強い責任感を持っていたシャーロットの手によって作り出された『ジェイン・エア』であるがゆえに、作品を貫く主人公の情熱、高い道徳性が人々の心を打つ珠玉作となり得たのである。

---

13 Cf. Teachman, p.22.